

日本最初の『ロミオとジュリエット』

——雑誌『喜楽の友』と小栗貞雄——

The First Adaptation of *Romeo and Juliet* in Japan :

Kiraku-no Tomo Magazine and Oguri Sadao

近 藤 弘 幸

要 旨

本論の目的はふたつある。ひとつは、鶴屋南北の『心謎解色糸』を『ロミオとジュリエット』の翻案であるとする主張を退け、一八七九年の春から夏にかけて刊行された『遊戯雑談 喜楽の友』という雑誌に連載された「ロミオとジュリエットの話」を、日本最初の『ロミオとジュリエット』として位置づけることである。そしてもうひとつの目的は、この無署名の連載の作者を、小栗貞雄と推定することである。小栗貞雄は、現在では消毒剤アルボースの発明によって財を築いた経済人としてその名を記憶されているが、その前半生においては、兄の矢野文雄とともに『郵便報知新聞』を支えた新聞人であり、翻案悲恋小説『色は空』を上梓した文人でもあった。そして「ロミオとジュリエットの話」をめぐるさまざまな断片をつなぎ合わせる、この小栗貞雄がその作者として浮かび上がってくるのである。

キーワード

シェイクスピア、明治、翻案、心謎解色絲、花月情話

はじめに

日本におけるシェイクスピア上演は、一八八五年五月一六日に大阪道頓堀の戎座で初日を迎えた『ヴェニス商人』の翻案、『何桜彼桜銭世中』^{（1）}を嚆矢とするのが定説である。しかしながら、竹村覚はこれに異を唱え、「それよりはるかに早い徳川十一代將軍家斉の時代に、既に *Romeo and Juliet* が上演せられ、非常な好評を博した事実が存してゐる」と主張する。竹村は、一八一〇年に江戸市村座の舞台に掛けられた、鶴屋南北作『心謎解色絲』を、『ロミオとジュリエット』の翻案とみなしているのである。

本論の目的はふたつある。ひとつは、この竹村の主張を再検討してその問題点を指摘し、一八七九年の春から夏にかけて刊行された『遊戯雑誌 喜楽の友』^{（2）}（以下、『喜楽の友』と略記）という雑誌に連載された「ロミオとジュリエットの話」を、日本最初の『ロミオとジュリエット』として位置づけることである。そしてもうひとつの目的は、この無署名の連載の作者を、小栗貞雄と推定することである。小栗貞雄は、現在では消毒剤アルボースの発明によって財を築いた経済人としてその名を記憶されているが、その前半生においては、兄の矢野文雄とともに『郵便報知新聞』を支えた新聞人であり、翻案悲恋小説『色是空』^{（3）}を上梓した文人でもあった。そして「ロミオとジュリエット

の話」をめぐるさまざまな断片をつなぎ合わせると、この小栗貞雄がその作者として浮かび上がってくるのである。

『心謎解色糸』

『心謎解色糸』を『ロミオとジュリエット』の翻案と考える竹村覚は、両者を比較して次のように述べている。

Shakespeare の傑作は翻案者よくその人を得て、換骨奪胎の妙は、原作の価値を少しも傷つけてゐない。ただ原作は、強烈な南国の夏の夜を思はせる、息詰まる様な恋愛悲劇であるに反し、翻案の方は、めでたしめでたしで打出しとなる喜劇に終つてゐるのが、その相違である。即ち前者に於ては、主人公 Romeo は、恋人 Juliet が死んだと聞いて、その墓前で毒を仰いで死し、ついで蘇生した Juliet も、この事実を知ると恋人の匕首を以て自殺し、もつて恋人の後を追ふのであるが、後者に於ては、死んだ筈の恋人お房は、綱五郎の拾つた解毒剤で蘇生し、大詰では、紛失してゐた定家卿の色紙も手に入り、恋人同志が夫婦になる段で終つてゐる。その他の内容に於ては、小異こそあれ、筋に於ては両者とも全く一致してゐる。³⁾

しかしながら、ここで竹村が紹介している『心謎解色糸』の概要は、必ずしも正確ではない。『心謎解色糸』は、お祭り佐七と芸者お糸の恋物語をはじめとするさまざまな副筋が絡み合つて成り立っているが、『ロミオとジュリエット』との比較を念頭にその梗概をまとめると、以下のようになる。

石塚弥三兵衛は、主君の家宝の色紙を紛失した咎により、謹慎を申しつけられる。本庄綱五郎は、足輕の家柄に生まれた自分を近習にまで取り立ててくれた弥三兵衛の罪を庇い、追放を命じられる。すべては、ふたりの失脚を目論んだ山住五平太の悪企みであった。芸者お絲に執心の五平太は、弥三兵衛から盗んだ色紙を質に入れ、彼女を身請けするための二〇〇両を用立てる。

追放を命じられた綱五郎は易者に変装し、一軒の絲屋の店先で商いつつ、色紙の行方を探っている。絲屋の店主、佐右衛門は三年前に亡くなり、今は後家のおりつが店を切り盛りしていた。娘のお房に急な縁談が持ち上がるが、店先の易者に恋心を抱いているお房は、それに同意しようとしなない。一方、店を乗っ取り、お房を妻にしよう⁽⁵⁾と企んでいた番頭の佐五兵衛もまた、思わぬ事態の展開に慌てる。彼は、医者から「服ませるが最後の助、忽ち往生かんまみ陀仏」の毒薬と、「天水を以て服ませた毒を消す妙薬」を手に入れる手筈を整える。

婚礼の席。いやがるお房だが、佐五兵衛は「お杯が済んだと申しまして、後で貰ひ引は、いくらもある事でございます⁽⁶⁾」と、強引に毒を盛った酒を飲ませる。お房は息を引き取り、婚礼は中止となる。佐五兵衛は、お房の持参金となるはずだった一〇〇両を、お房とともに埋葬するよう、おりつを説き伏せる。佐五兵衛に届けられるはずだった気つけ薬は、行き違いがあつて偶然、綱五郎のものとなる。

綱五郎は、色紙が質入れされていることを突き止めるが、それを請け出す金がない。絲屋の娘が一〇〇両とともに埋葬されると聞いた綱五郎は、その金を盗み出す決意を固め、墓所に出向く。綱五郎が死人の襟に入れられた金を取り出そうとすると、「雨車の音はげしく、雨水咽喉へ入りし思ひ入れにて、お房「ウム」とうめく」——「こりやコレ惣身の温まり、蘇生つたか」。綱五郎は逡巡するが、結局お房を助けることにし、持っていた気つけ薬を

飲ませる。意識を取り戻したお房は、かねてからの恋心を打ち明け、綱五郎もそれを受け入れる。

お絲の兄、葛飾十右衛門には、お房の姉で綱五郎の許嫁だった小絲と深い仲になり、駆け落ちした過去がある。十右衛門と小絲は、今では半時九郎兵衛、お時と名を変え、町人暮らしをしながら夫婦で悪事を重ねていた。この九郎兵衛もまた、お房とともに埋葬された一〇〇両の話聞きつけ、墓所にやってくる。暗闇のなかでもみ合いが起こり、九郎兵衛はお房の片袖を手に入れる。

九郎兵衛とお時は、死んだはずのお房をかくまって暮らしている綱五郎を脅迫し、証拠の片袖と交換に一〇〇両を手に入れようとするが、綱五郎に正体を見破られる。ふたりは改心し、悪事を働いて貯めた一〇〇両を差し出す。こうして二〇〇両の金を手に入れた綱五郎は、質請けして無事盗まれた色紙を取り戻す。

以上が『心謎解色絲』のあらすじである。「死んだ筈の恋人お房」が、「綱五郎の拾った解毒剤で蘇生」するといふ竹村の要約が、かなり不正確なものであることは明らかだろう。お房は確かに綱五郎に想いを寄せているが、綱五郎はお房のことを知らない。彼は金目当てに知らない女の墓を暴くのであり、その時偶然お房を蘇生させるのは、彼の持っていた解毒剤ではなく雨粒なのである。生き返ったお房から恋心を打ち明けられた綱五郎は、一連の出来事に「不思議の因縁」を感じてお房を妻とする。こうしてみると、『ロミオとジュリエット』と『心謎解色絲』は、「小異こそあれ、筋に於ては両者とも全く一致してゐる」とは言い難い。墓場における蘇生という共通点が強

い印象を残すのは確かであるが、逆に言うと、両者の類似性はほぼその一点に絞られるのである。トンプソンとトンプソンは、ある作品を別の作品の翻案——ふたりは「翻案 adaptation」という言葉ではなく「ヴァージョン version」という言葉を使っているが——とみなすための基準として、「関連性の強い類似性 perti-

「attested likeness」と「証言された類似性 attested likeness」という概念を提示している。

私たちの提案は、原典テキスト source text とヴァージョン・テキスト version text の類似と差異が、双方向の（原典からヴァージョンへ、ヴァージョンから原典へ）興味深い思考を生み出し、かつ原作のテキストがなければヴァージョン・テキストのいくつもの特徴が存在しないであろう、と直感できる場合、関連性の強い類似性が存在する、というものである。後者を論証するのは、前者を論証するよりも困難である。ふたつの作品を比較／対照することで、何らかの新しい考察を引き出すことは、往々にして可能であるが、ヴァージョンから得られる新しい考察は、単なる類似／差異から得られる新しい考察とは、その程度において異なるものなのである。⁽⁸⁾

『ロミオとジュリエット』と『心謎解色糸』の「類似／差異」を「比較／対照することで、何らかの新しい考察を引き出す」ことは、もちろん可能である。しかしながら、両者の間に「関連性の強い類似性」があるとは言えないだろう。

トンプソンとトンプソンは、もうひとつの尺度として「証言された類似性」を挙げている。「関連性の強い類似性がテクスチュアリティの問題であるのに対し、証言された類似性は実生活の考証 real-life documentation の問題である。証言された類似性は、作者による直接および間接の発言によって証言される」⁽⁹⁾。『心謎解色糸』を『ロミオとジュリエット』の翻案であるとする作者の証言は、直接にも間接にも残されていない。「証言された類似性」の観点からすると、最低限、鶴屋南北が『ロミオとジュリエット』を知っていた、ということが立証される必要がある

るだろう。これについて竹村は、オランダ人が出島で上演した素人芝居の演目に『ロミオとジュリエット』が含まれていた可能性を指摘しているが、竹村自身が認めているとおり、これはあくまで「想像説」¹⁰の域を出るものではない。さらに「長崎で上演せられた *Romeo and Juliet* が、どういふ様にして江戸に伝へられ、そして南北の耳に入つたか。これについては全く手掛りはない」¹¹のである。

竹村の議論は、墓場における蘇生という一点のみから『心謎解色絲』を『ロミオとジュリエット』の翻案と断定し、その結論からさかのぼる形で鶴屋南北が『ロミオとジュリエット』を知り得た経路を「想像説」によって再構築したものに過ぎず、説得力に富むものであるとは言い難い。¹²仮に竹村の「想像説」が正しかったとしても、そうした経路から鶴屋南北が知り得た情報は、「墓場で女が蘇生する芝居がある」という程度のものであっただろう。それをもって、『心謎解色絲』は『ロミオとジュリエット』の翻案であるとするのは、いささか無理があるのではないだろうか。

『喜楽の友』

『心謎解色絲』が『ロミオとジュリエット』の翻案でないとすると、日本で最初の『ロミオとジュリエット』は、雑誌『喜楽の友』に連載された「ロミオとジュリエットの話」ということになる。この雑誌は、竹村正路なる人物が一八七九年四月一〇日に創刊したもので、第一号から第八号までが現存し、東京大学の明治新聞雑誌文庫に収蔵されている。発行元は、本所区両国元町一番地の喜楽社で、すべて表紙とその裏の「目録」（目次）、本文一四

ページという体裁になっている。四月二十五日出版の第二号からは表紙に「毎月二号ツ、」という記載があり、以下、第三号が五月一日、第四号が五月二九日、第五号が六月一日、第六号が七月一日、第七号が八月九日、第八号が八月二九日の刊行となっている。六月と七月はともに一号だけの発行にとどまっているが、その理由については第六号に「都合により去月墨陀堤の片辺に弊社を移せしより思の外に発兌の期を過ぎ看客のいかに思ひ玉ふらんも測り知れざれど今迄に変わらず打続きて売出候ハん程に必悪ふ思ひ玉ず往来かけて賑しく奇文瑤章を貽り玉ん事を願ふにこそ」という説明があり、この号から喜楽社の住所は向島須崎村六五番地となっている。⁽¹³⁾

篠田敏造は、この雑誌について、「桜田助作翁から『愛読の雑誌だつた』と聞かされ」たとの証言を記録している。⁽¹⁴⁾ 第八号の「目録」の下に掲載された「次号社題」(投稿募集)にある「諸君よりの御投書数多にして何分一時に載せきれ升せぬ故追々順に載せ升からあしからず思召下さい升し」という言葉も、同誌の人気のほどをうかがわせる。しかしながら「追々順に載せ升」という約束もむなしく、刊行はここで途絶えたらしく、一八八三年に内務省図書局が編纂した『図書局書目——新聞雑誌之部』には、第八号までの記載しかない。⁽¹⁵⁾

この雑誌は、今でいうところの総合文芸雑誌のようなもので、さまざまな情報を伝える「雑談」、読者からの投稿掲載した「詩」(漢詩)、「歌」(短歌)、「俳諧」、「雑俳」(三題語)、「雑記」の各コーナー、劇場のスケジュール(「座名」、「狂言名題」、「出勤俳優」、「興業月日」)をまとめた「劇場新表」、連載ものの「統物語」などで構成されている。「編輯兼印刷人」を務めた竹村正路については、詳細が分からないが、創刊にあたって「銀座寓染花仙史」の署名で寄せられた「竹村氏喜楽の友ヲ発兌スルニ贈ル」という「祝詞」のなかに、以下のような描写がある。

先生ハ喜楽ノ人ナリ嘗テ沼津ニ寓ス僕一日其居ヲ訪フ門破レ牆壞レ座ニ長物ナク屏障骨皆ナ露ハル僕睨シテ曰ク嗚呼先生ノ家事ニ構ハザルモ亦タ甚イ哉先生莞爾トシテ爐間ノ一酒陶ヲ指テ曰ク我が生唯是レ而已矣ト其ノ平生ノ喜楽ナル知ル可シ曩日先生突然來テ曰ク吾頃日一新誌ヲ發兌セリ題ヲ喜楽の友ト云フ子夫為ニ一言ヲ贈レ且ツ其題目ハ頗ル奇ナリト雖モ載ル所ハ皆ナ真面目ノ事子誤テ戲謔ノモノト為ス勿レ敢テ囁スト僕笑テ曰ク先生ノ真面目トナス事ハ豈ニ世人ノ目シテ奇トシ妙トスル処ナラザルヲ知ランヤ而シ題ヲ喜楽ト云フ既ニ妙且ツ言ニ思ヘ世間ノ謂ユル苦楽ハ果シテ一定物ナル乎在昔仏譬喻經ヲ説テ曰ク譬猶如レ水人見為レ水、餓鬼見為レ火ト故ニ高尾ハ千苦万苦ノ苦ノ世界ト言フ是レ身ヲ以テ憂苦ノ奴トナスモノナリ今先生ハ然ラズ自家ノ喜楽ヲ拈メテ滿天下ノ人ニ普及セントス豈ニ先生ハ無憂苦ヲ以テ世ヲ度スル真ノ大喜楽ノ大導師ニアラス乎然ラバ其發兌スル新誌モ亦タ大喜楽ノ奇文タル知ルベキノミ先生曰ク善シ子コレヲ書セト便チ書シテ贈ル而シテ僕モ亦タ既ニ喜楽党中ノ人トナリシヲ知ラズ(第二号一—二頁)

創刊にあたって掲げられた竹村の手になると思われる「社告」は、「生涯苦勞を為さんとて我々は此世に生まれ来りしにあらざり力の有らん限り歓樂を為さんとこそ願ふなれ」と歓樂を人間の本性として位置づけ、「我々ハ今遊戯娛樂を主とする新紙を創設して以て人生の勞役勤苦ニ偏倚するを防ぎ兼て又近來新紙の政論常務に偏倚するを救はんと欲するなり」と、同誌刊行の目的を謳いあげている(第二号一頁)。

「ロミオとジュリエットの話」

この『喜楽の友』に「続物語」として無署名で連載されたのが、「ロミオとジュリエットの話」である。作品のタイトル表記には、連載中で揺れが見られる。第一号では、「(ロミオ)ト(ジュリエット)ノ話」となっており、以下「(ロミオ)と(ジュリエット)の話」(第二号)、「ロミオとジュリエットの話」(第三号)、「ロミオとジュリエットの話」(第四号、第五号)、タイトルなし(第六号)、「ロミオとジュリエットの話」(第七号、第八号)となっている。タイトルの表記の揺れは、本文にも反映されている。第一号掲載分では仮名にカタカナが用いられているが、第二号以降は平仮名となっている。第一号、第二号では外国の固有名詞が括弧書きになっているのに対し、第三号以降は傍線を付されている。第四号、第五号のタイトルの「ロミオ」と「ジュリエット」からは傍線が脱落しているが、本文中では一貫して傍線が用いられている。

外国の人名や地名を何らかの方法で区別する表記法は、当時広く用いられていた。これは、そうした固有名詞が今以上になじみの薄いものであったということもあるが、文語体において仮名としてカタカナが用いられたことや、平仮名を用いたいわゆる「俗談平話」¹⁶⁾においても主格の助詞「は」に「ハ」が用いられたことが大きな理由である。その場合、もともと一般的なのが傍線を付すやり方であった。括弧書きから傍線への変更、カタカナから平仮名への変更は、いずれも読者の読みやすさを配慮してのものと思われる。本論では、こうした変更を反映させ、

「ロミオとジュリエットの話」という表記を採用する。

「ロミオとジュリエットの話」は、連載初回に添えられた「英国ニ於テ有名ナル狂言作者（セーキビル）氏ガ芝居ガ、リニ著述セル書物ノ中最面白キ話ヲ同国人（チャーレスラム）氏ガ通俗ノ文ニテ綴リタル珍書ヲ得ケレハ、毎号訳文一條ヲ載セ、江湖同好ノ諸友ニ示サント欲ス」（第一号二頁）という言葉が示しているように、シエイクスピアの戯曲ではなく、ラム姉弟の『シエイクスピア物語』（「ロミオとジュリエット」の執筆は弟のチャールズ・ラム）を下敷きにしたものである。幕開きを例に確認しておこう。ラムの物語は、次のように始まる。

The two chief families in Verona were the rich Capulets and the Montagues. There had been an old quarrel between these families, which was grown to such a height, and so deadly was the enmity between them, that it extended to the remotest kindred, to the followers and retainers of both sides, inasmuch that a servant of the house of Montague could not meet a servant of the house of Capulet, nor a Capulet encounter with a Montague by chance, but fierce words and sometimes bloodshed ensued; and frequent were the brawls from such accidental meetings, which disturbed the happy quiet of Verona's streets.¹⁷⁾

「ロミオとジュリエットの話」の冒頭は、以下のとおりである。

伊太利国（ウエトロ）ノ都ニ富豪ノ聞エ高キ二家アリヤ（モンテグ）ト云ヒ一ヤ（カピレット）ト云フ兩家共ニ巨万ノ財産ヲ有シ負ケズ劣ラヌ身代ニテアリシカバ昔ヨリ兩家ノ交際兎角ニ疎マシク動スレハ風波起リ

テ争論絶間ナカリシ斯テ年ヲ経ル程ニ怨益深クナリテ今ハ縁ニ繫ル親族ハ勿論心ナキ奴婢マデモ相互ニ忌憎
ミテ仇敵ノ思ヒヲ為スニ至リスサレハ兩家ノ奴婢等偶塗上ニ出会フコトアレハ各口ヲ極メテ罵詈訶罵シ果ハ血
ヲ見ル程ノ鬪殴ヲナシテ都府ノ騒動ヲ惹起セシコトモ度々ナリシ（第一号一二頁）

こうして始まる第一号掲載分は、ロミオとベンヴォリオがマーキュシオをともなつてキャピレット家の仮面舞踏会
に出かけるまでを描く。以下、仮面舞踏会でのロミオとジュリエットの出会い（第二号）、ふたりの結婚の約束（第
三号）、ロレンスへの相談とふたりの結婚、その後のロミオによるティボルト殺害（第四号）、ロミオの追放とそれ
を知ったジュリエットの反応（第五号）、ふたりで過ごす一夜とロミオのマントヴァへの出立（第六号）、パリスとの
結婚話とジュリエットの服毒（第七号）、ロミオとパリスの墓場での遭遇（第八号）までが描かれ、『喜楽の友』刊行
終了とともに物語も中絶している。もし刊行が続いていれば、おそらくあと一回か、多くても二回の連載で、結末
までたどり着いていたことだろう。

「花月情話」——「ロミオとジュリエットの話」との類似性

先述のように、「ロミオとジュリエットの話」は無署名で連載されている。シェイクスピアの戯曲ではなくラム
の翻案を下敷きにしたものとはいえ、この日本最初の『ロミオとジュリエット』を「江湖同好ノ諸友ニ」提供した
人物は、いったい誰だったのだろうか。それを推測する手がかりになるのが、「ロミオとジュリエットの話」から

五年後の一八八四年二月、静岡の地方紙『かえゆう函右日報』に連載された『ロミオとジュリエット』の翻案、「奇聞花月情話」（以下、「花月情話」と略記）である。掲載に先立つて同紙は、「頃日社友佐藤蔵太郎氏（矢野文雄君ノ纂訳補述セル経国美談ヲ筆記シタル人ナリ戯号ヲ菊亭香水ト云フ）ハシエーキスピアノ著作ニ係ル小説某書ヲ訳述シテ之ヲ本社ニ投寄サレタリ依テ將サニ本日ヨリ続々之ヲ掲出シ以テ諸君ノ観覧ニ供セントス」と述べ、それがシエイクスピアの「著作ニ係ル小説某書」すなわち『シエイクスピア物語』によるものであることを明かしている。

作者の菊亭香水こと佐藤蔵太郎は、一八五五年に佐伯藩の下士の子として生まれ、明治の新聞界で活躍した文筆家である。大分での教員生活ののち、一八八一年九月に同郷の先輩、矢野文雄の誘いを受けて上京する。柳田泉が書き写した佐藤の未刊行の自叙伝『文士佐藤鶴谷伝』は、ふたりの出会いについて、「九月太政官大書記官矢野文雄、報知新聞社長藤田茂吉ノ両氏相前後シテ佐伯ニ帰省シ、旧城三ノ丸ニ於テ演説会ヲ開キ、本邦現下ノ状勢ヲ説キ、大ニ郷人ノ政治思想ヲ鼓舞ス、矢野氏ハ県下諸郡ヲ巡廻シテ帰京ノ時、鶴谷ヲ東京ニ伴フ」と述べている。¹⁸⁾

矢野文雄は、一八五一年に佐伯藩の中士の子として生まれた。一八七〇年に父光儀が下総国葛飾県（現在の千葉県北西部、埼玉県東部、茨城県西部にまたがる地域）の知事に任命され、一家は上京する。慶應義塾に学んだ矢野は、一八七七年、『郵便報知新聞』の発行元であった報知社に入社する。報知社はその後、大隈重信との結びつきを深め、「矢野文雄は抜かれて役人となり、大蔵省の少書記官から、太政官の大書記官に歴任した」²⁰⁾。佐藤蔵太郎の自叙伝が回想しているのは、この太政官大書記官時代の出来事である。その翌月、いわゆる「明治一四年の政変」によって大隈重信が政府を追われるとともに矢野も官職を辞し、報知社に復帰する。翌年、佐藤蔵太郎も報知社に入社する。『函右日報』の紹介にあるように、佐藤は勤務のかたわら矢野の政治小説『齋武経国美談前篇』²¹⁾の完成に

貢献するが、一八八四年九月には同社を去つて大阪毎朝新聞社に入社する。

「花月情話」の連載は一八八四年二月九日に始まり、「第二回」(二〇日)、「第三回」(二五日)、「第三回ノ続キ」(二六日)、「第四回」(二七日)、「第五回」(二九日)、「第五回ノ続キ」(三〇日)と続き、「第六回」(二二日)はロミオとジュリエットの結婚の約束までを描いている。その翌日の紙面では、「秋巒情仙」なる読者が、この作品を絶賛して「賦一律以呈菊亭先生案下」と述べ、「刻翠裁紅筆有華。滿腔錦繡吐天葩。多情居易琴中淚。薄命江淹夢裡花。芸海元來生恨種。情天畢竟易參差。三生綺累真無礎。何讓妙詞温八又。」という詩を献呈している。⁽²³⁾ しながら、こうした好評にもかかわらず、その四日後には「記者曰ク欧州奇聞花月情話ハ訳者菊亭氏ガ病氣ニテ其ノ続稿ヲ起ス能ハズ依テ全快ノ日マデ一時中絶ス看官幸ニ之ヲ領セラレヨ」との告知が掲載され、その後連載が再開されることはなかつた。⁽²³⁾

こうして中絶したままとなつた「花月情話」であるが、その掲載分を読んでみると、登場人物名の表記、言葉遣い、ラムの原典からの逸脱などに、「ロミオとジュリエットの話」との明らかな類似が認められる。登場人物名は、それぞれ次のように表記されている。

「ロとジの話」

キャピレット

カピレット

モンタギュー

モンテーク

ロザリン

ロザリン

「花月情話」

加美列戸

モシアール
門泥具

ロザリン
魯坐倫

ロミオ

ロミオ

露美雄／魯美雄⁽²⁴⁾

ベンヴォリオ

ベンプリヲ

弁振雄

マーキウシオ

モルキウシヨウ

毛留宇

テイボルト

タイボルト

陀非留士

ジュリエット

ジュリエット

ジュリエット
寿李咲散

テイボルトをタイボルト／ダヒルトとしている点に相違は見られるが、総じて類似していると見えるだろう。モンタギューをモンテグ／モンデーク、ベンヴォリオとともにベンプリヲ、マーキウシオをモルキウシヨウ／モルウとしてゐる点は、特に注目に値する。

次に言葉遣いの類似を確認するために、物語の幕開きを取り上げてみよう。「花月情話」連載初回は、前口上のあと次のように始まっている。

伊太利国威呂那ノ都府ニ財巨万ヲ有セル両家ノ豪族アリテ其ガ一ヲ門泥具ト言ヒ今一ヲ加美列戸トゾ称ヘケル
 ガ両族共ニ祖先ノ代ヨリ夥多ノ財産ヲ所有シテ負ケズ劣ラズノ身代ナリシガ如何ナル宿怨ノアリモヤシツル此
 ノ門泥具ノ家ト加美列戸ノ家トハ先代ノ時ヨリモ其間柄睦カラデ互ニスレズレノ中トナリ動モスレバ両家ノ
 間ダニ風波ヲ生ジ白眼合テゾ幾多ノ歲月ヲ送りケルガ今日ニ至リテハ両家ノ縁ニ繋ガル、ノ親戚ハ言フモ更ナ
 リ其ノ召仕ハル、奴婢等ガ如キ輩ニ至ルマデ互ヒニ雙方ヨリ相敵視シテ遇マ途ニ出逢フ時ナドハ口ヲ極メテ罵

り合フノミカ果テハ闘合ノ喧嘩トナリテ一方ナラス騷動ヲサヘ惹起スコト度々ナリシト⁽²⁵⁾

これを先に引用した「ロミオとジュリエットの話」の冒頭と比較すると、「動スレハ風波起リテ」／「動モスレバ両家ノ間ダニ風波ヲ生ジ」、「今ハ縁ニ繫ル親族ハ勿論心ナキ奴婢マデモ相互ニ忌憎ミテ仇敵ノ思ヒヲ為スニ至リスサレハ」／「今日ニ至リテハ両家ノ縁ニ繋ガル、ノ親戚ハ言フモ更ナリ其ノ召仕ハル、奴婢等ガ如キ輩ニ至ルマデ互ヒニ雙方ヨリ相敵視シテ」、「騷動ヲ惹起セシコトモ度々ナリシ」／「騷動ヲサヘ惹起スコト度々ナリシト」などに表現の類似が認められる。またこの冒頭部は、ラムの原文からの逸脱においても共通点が見られる。原文では the rich Capulets and the Montagues」という順序になっているのに対し、「ロミオとジュリエットの話」および「花月情話」では、そろってモンテグ／門泥具が前、カピレット／加美列戸が後ろと、逆になっているのである。ラムがキャピレット家の宴会を and all comers were made welcome if they were not of the house of Montague⁽²⁶⁾ と説明している部分については、さらなる逸脱の共有が確認できる。「ロミオとジュリエットの話」は、「其他招カザルノ客モ来ル者ハ拒マデ饗応セント其準備マデ整ヒシガ若(モンテグ)家ノ人紛レ入ラハ目ニ物見セント待構ヘタリ(第一号一二頁)と語り、モンタギュー家の人間が紛れ込むことに対するキャピレット側の警戒を付け加えている。「花月情話」は、それを受け継ぐように、「若シ斯ル際ノ混雜ニ紛レテ彼レ門泥具ノ一族等潜ビ入シモ知レ難ケレバ万一然ル事ノ有ランニハ痛ク彼等ニ恥辱ヲ与ヘテ日頃ノ怨ミヲ晴ラサンモノト其ガ事ノ用意マテ為ツラヒツ待構テゾ居タリケル」と述べる。

ロミオの人物像の紹介にも、同様のことが言える。ラムの描写は、彼のロザリンへの恋愛感情に関わるものに限

定(28)されている。これに対し、「ロミオとジュリエットの話」の語り手は、ロミオの容貌と資質についてもコメントする。

(モンテーク) 家ノ子息(ロミオ) 八容貌冠玉ノ如ク文武兼備ノ壮士ナリシガ如何ナル悪縁ニヤ同府中ノ婦人(ロザリン)ニ深ク掛想シ争テ涉リニ舟ヲ得テ彼人ニ心ノ丈ヲカキ口説ンモノヲト人知レズ思ヒヲ焦シ又(ロミオ)ノ親友(ベンブリヲ) 独コレヲ知り(第一号二二頁)

「花月情話」もまた、ロミオの「天資才美」に言及する。

彼ノ門泥具ノ子息ニ露英雄ト呼ベルハ天資才美ノ二ツヲ具備シテ容貌端麗玉ヲ欺キ風姿威アツテ猛カラザル当
 時ニ得難キ少年ナリシガ如何ナル宿世ノ縁ヤアリケン同都府ニ住ム者ニテ魯坐倫トイヘル少女ニ深クモ日外想
 ヒヲ懸ケテアハレ好キ機ヲ得ルノ時シモアラバ我が心ノ丈ヲ打明ケテ彼レガ情ヲ受ケナンモノト曾胸ヲ焦シ
 居ルテバ其ガ親友ナル弁振雄ノミ独リ心ニ推シ居シトゾ(29)

ここでは、ロミオのロザリンへの報われない恋心を、「如何ナル悪縁ニヤ」／「如何ナル宿世ノ縁ヤアリケン」と表現していることも両者に共通している。ベンヴォリオだけがロミオの片思いを知っていたという、ラムにはない記述が付け加えられている点も、同様である。

「花月情話」は、「ロミオとジュリエットの話」に見られる誤訳も継承している。ラムは、ロミオがキャピレット家の宴會に潜入していることに気づいたときのテイボルトの反応を「And he stormed and raged exceedingly, and would have struck young Romeo dead」と語る。言つまでもなくこれは仮定法の表現——「老キャピレットの制止がなければ）テイボルトはロミオを殴り殺していたことであろう」——であり、現実には暴行は行われない。この一節を、「ロミオとジュリエットの話」は「酒宴の席をも憚らず、（ロミオ）に対し、口さかしく言罵り果ハ暴行に及びて、あわや打殺さん勢なり」（第二号一頁）とし、「花月情話」はさらに別室に連れ込んだの集団暴行にまで発展させている。

忽チ魯美雄ヲ引捕ヘツ汝ハ常ヨリ中惡シキ門泥具家ノ子ニアリナガラ招キモセラレデ加美列戸ノ夜會ニ能クモ
入來リシヨナスル場合モアランカトテ兼テ用意ヲ為シ居タリ此方ニ來ヨトテ魯美雄ヲバ無理ニ離レシ一室ニ連
レ行キ日比ノ怨ミ思ヒ知レト命モ絶ヘナンバカリニマデ大勢來ツテ打擲シケルヲ

「ロミオとジュリエットの話」における記述は、「誤訳」とまでは言えないかもしれない。ラムの表現は確かに曖昧さを含んでおり、「そもそも暴行はなかった」とも解釈できるし、「暴行はあったが殺害には至らなかった」とも受け取れる。シェイクスピアの戯曲と照合すれば、前者の意味であることが確認できるが、「ロミオとジュリエットの話」の作者はラムの表現を後者の意味に受け取ったのであろう。「花月情話」における記述は、その解釈を受け継ぎ、さらに膨らませたものと考えられる。

「ロミオとジュリエットの話」と「花月情話」には、いずれも西洋の慣習になじみの薄い明治の読者に配慮した注が加えられているが、そこにも明白なつながりが認められる。キャピレット家で催される仮面舞踏会について、前者は「仮面を冠りて宴席へ立入る事我邦にては曾てなき事なれども西洋にては伎踊会杯へ貴人達の仮面を冠りて行くは間々あることなり」(第二号一頁)と説明し、後者もまた「仮面ヲ被テ宴席へ入ルナド本邦ニハ無キ事ナレドモ西洋ニテハスル踏舞ノ席ニ貴人達ノ仮面ヲ被テ行クコトハ往々アルコトナリ」としている。

また、バルコニー・シーンでロミオが名乗り出る場面を、ラムは *he bade her call him Love, or by whatever other name she pleased, for he was no longer Romeo, if that name was displeasing to her* と語⁽³²⁾る。この箇所は「ロミオとジュリエットの話」では「御身の情ハとくに知たり左までに言るゝならば吾身をラブと呼給へ(可愛人といふ意なり)もし好しからぬとならば我が為に佳名を撰ばれよ今より我名ハロミオならじ」(第三号一頁)となつてゐる。「花月情話」は、「御身ガ厚キ情ケノ程ヲバ我レ疾クヨリモ之ヲ知レリ然ハ然リナガラ今言フ詞ノ果シテ真意ニ違ハスナラバ此身ヲ(Love)ト呼ビテ給其ガ好マナシカラヌトナラバ我が為メニ宜キ名ヲ撰バレヨ我が身ハ今ヨリ露美雄ナラズ」としたうえで、「筆者日本文中原語(ラブ)ハ愛スル又ハ恋フト云フガ如キ意味ヲ含メル文字ニシテ猶ホ我国ノ情郎ト解シテ可ナルベシ」との注を付けている。この部分は、注だけでなく、*that name* を「ロミオという名前」ではなく「Loveとらう名前」と誤つて解釈している点も共通している。

「ロミオとジュリエットの話」の作者の推定

「ロミオとジュリエットの話」と「花月情話」に見られる、こうした明らかな類似性（関連性の強い類似性）から考えて、両者には何らかの結びつきがあるものと考えて間違いない。ここで興味深いのが、柳田泉の以下の記述（「証言された類似性」）である。

訳者と署名している菊亭に、英語の知識が皆無という程ではないとはいえ、シェイクスピアを原典で読むまでの知識は無かろうと思ったので、この点確かめたところ、まさにその通り、これの原話は矢野文雄氏の弟小栗貞雄氏から聞いて書いたものだとの返事であった。それで、小栗氏は「シェイクスピアとラムの」³⁵どちらを読んだか、それを今一応突き止めるべきであるが、まだ小栗氏には伺っていない。

つまり、佐藤蔵太郎の「花月情話」は、小栗貞雄がシェイクスピア／ラムの『ロミオとジュリエット』を翻訳／翻案したものを再翻案したものだといふのである。

一八六一年生まれの小栗貞雄は、兄の矢野文雄と同じく慶應義塾に学んだが、「記憶力の強健を以て常に教師を驚嘆せしめ、優等生となりて学級を超進せられし事一再にして止まらず」という秀才ぶりであったという。その後、大学予備門に入るが、学生の政治演説を禁止するという方針に反発し、退学する。

明治十三年（一八八〇年、一八八一年）頃に至りて漸く弁論演説の必要を世に認められ、そがために結社は大に勃興し、次で改進黨の組織せらるゝや、氏は議政會員尾崎（尾崎行雄）、犬養（犬養毅）の諸氏と共に之に入つて盛んに進歩主義を唱導し、其傍ら今の錦城中学の前身たる三田英学校の講師となりて青年の教育に従事し、十九年（一八八六年）報知新聞社に入り居る事凡三年、廿一年（一八八八年）の春欧米各国を漫遊し、帰來再び報知新聞社に入りて社務を主宰し、操觚の名士として其名文壇に高かりしが、廿五年（一八九二年）自ら期待する處ありて飄然筆を捨て、実業界に身を投ず⁽³⁶⁾

報知社時代の小栗貞雄について、松居松翁は、「編輯局の二階へ、ハイカラな洋装の若紳士が、洋書を抱えて、楷梯段をトントン登つて行くを、誰かと原（原抱一庵）に聞けば、矢野先生の令弟貞雄氏だと聞かされ、才氣煥発の御姿」だったと述懐している⁽³⁷⁾。

ここで、小栗貞雄のテクストをA、「ロミオとジュリエットの話」をB、「花月情話」をCとすると、BとCの類似性を説明し、かつCがAを参照したものであるという柳田の記述に一致する経路として、①A↓B/A↓C、②A(=B)↓C、③B↓A↓Cが考えられる。①では、BとCはともにAに由来するものと考えられる。この場合、BとCは別個の作品ということになるが、それにしてもBとCは類似し過ぎている。BとCが同じ作者によるものと考えれば（つまりCをBの改訂版と考えれば）、この点は説明できる。その場合、Bの作者は佐藤蔵太郎ということになるが、これは時期的にありえない。

佐藤蔵太郎と小栗貞雄に接点があったのは、佐藤が矢野文雄にしたがって上京した一八八一年九月から大阪毎朝新聞社に移籍する一八八四年九月までの三年間——その間、佐藤は「矢野文雄氏ノ令弟矢野武雄、小栗貞雄ノ両氏ヨリハ学問上其他ニ就キ最モ懇切ニ訓誨ヲ受シ⁽³⁸⁾」と語っている——である。佐藤と矢野、小栗は同郷であり、幼少時に何らかの接点があった可能性は否定できないが、仮にそうしたつながりがあったとしても、矢野家の上京とともに途絶えたものと思われる⁽³⁹⁾。したがって、一八七九年に「小栗貞雄氏から聞いて」佐藤蔵太郎が「ロミオとジュリエットの話」を執筆したということはあるのである。

②は、AとBが同一作品であり、それを参照してCが書かれた、という経緯を表している。つまりBの作者は小栗貞雄である。③の経路には、Bの作者が小栗貞雄である場合と小栗、佐藤以外の第三者である場合のふたつの可能性がある（Bの作者が佐藤であることはありえない）。後者だとすると、誰かが訳したBを読んだ小栗が、それを自分の翻訳Aとして佐藤に提供したことになる。論理的にはありえるが、小栗がそのようなことをしたとは考えにくい。

以上を考えると、「ロミオとジュリエットの話」の作者は、小栗貞雄である可能性が極めて高い。本論冒頭で触れた『色是空』も、相思相愛の恋人がすれ違いによって引き裂かれる物語であり、小栗の文学趣味を表すものとして、小栗と「ロミオとジュリエットの話」を結びつける間接的な証拠のひとつとなるだろう。また、これとは別の状況証拠も存在する。というのも、この作品が連載された『喜楽の友』には、報知社の関与がうかがわれるからである。その第二号には、「報知社 岡敬孝述」の署名で、次のような「祝詞」が掲載されている。

ひろ
 広き世の中に種々の職業は有とも五穀を耕す者ハ其器械とする鋤犁を造らず鋤犁を製する鍛工ハ必ずしも自か
 ら織りて衣るものに非ず皆な己れくが得手なる事業に依りて専ら精を極めるものなり然れど其中に特り雜貨店
 ハ普く人々の需要に應ぜんとするより他人が作れる種々の物品を集めて販鬻するに其座頭堆く積蓄へしハ
 木履草鞋の類なる粗悪物多きに居る是偏に只品物の夥多なるを欲するのみにて其精良を撰ざるに因るなるへし
 此喜楽の友と題せる雑誌に於ける亦然り唯僅かに細き一枝筆もて百般の技芸を何くれとなく書蒐め遺漏なから
 んとすれハ其精を撰びて衆客の好みに應せんにも亦応に至難の業なるべしと思ハる依て其道の長者に諮詢し
 勤めて雜貨店視せらるゝ事なく大に江湖の愛翫を得らる可しと企望し不肖をも顧みず開業の始に当り聊か無用
 の弁を費して云爾(第二号一頁)

報知社史によれば、「岡敬孝は、幕臣で、小西(小西義敬、前島密の秘書で報知社の創立者のひとり)とは同窓の友であ
 つたが、創刊当時に前島密の推薦で入社した。文章家ではなかつたが、他人の文を添削することが巧みであつた。
 編輯に、経営に小西のよき相談相手であつた。岡は後に『新聞紙条例』に引かゝり、社の代表として前後二回入獄
 の記録がある」(10)。一八七四年、報知社は栗本鋤雲を主筆に招き、岡はその助手という立場になるが、報知社創設期
 以来の大物が、社名入りで「祝詞」を寄せていることは注目に値する。

文芸雑誌と新聞社の深い関係は、当時、珍しいものではなかつた。柳田泉は、次のように指摘する。

だが、明治初期の文芸雑誌の発芽状態は全然新聞への寄生状態から出てゐるので特に注意さるべきであらう。

例へば「花月雜誌」は朝野新聞の余力に成り、「芳譚雜誌」は元來は宝丹宣伝雜誌の変態であり、「人情雜誌」の如きは東京絵入新聞の小説の蒸し返しであり、その他大抵何等かの新聞と縁故をもたぬものが少ない。⁽⁴²⁾

『喜楽の友』に「祝詞」を寄せた新聞関係者は岡敬孝だけではない。創刊号には「日就社加藤九郎」の署名の「祝詞」が掲載されているが（第一号一二頁）、日就社は『読売新聞』の発行元である。「加藤は、もと「采風」新聞（明治八年（一八七五年）創刊）の編集長で、自由民権主義の急先鋒として政府を激しく攻撃し、九年（一八七六年）一月に新聞紙条例最高刑の禁獄三年に処せられた。満期出獄後の十二年（一八七九年）二月、本紙の初代論説委員に迎えられた」⁽⁴³⁾。加藤の死亡時には、『読売新聞』紙上に追悼記事が掲載され、入社の経緯について、入獄中に「我が日就社員永井碌氏（今の朝野新聞社員）も亦た罪を筆に得て同獄内に在り加藤氏と朝暮起居を同ふして薰陶教誨を受くるの余深く景仰を氏に属し他日必ず我日就社員たらんことを約せし」と紹介されている。⁽⁴⁴⁾

『喜楽の友』第三号（一二頁）に、「浅草 浣花翁」の署名で「祝詞」を寄せた岡本長之も、『読売新聞』に所縁のあった人物である。彼もまた、死亡時に『読売新聞』紙上に追悼記事が掲載されている。

官暇の筆すさびを折々弊社へ寄せられて深切に後生を導かれし浣花翁ハ此ほどより病氣のところ養生協はず一昨日病死されたり翁ハ東京府士族にしてして本名岡本長之と云ひ明治初年（一八六八年）召出されて小菅県の判事となりし職を転じて五條県の大属を勤め明治三年（一八七〇年）の十一月始めて開拓使出仕となり開拓大典より七等出仕を經明治十年（一八七七年）一月権少書記官となり正七位に叙せられ病に罹

られる前まで一日も勤仕に怠たらず職務に勉強せられたれば今年四月特別に慰勞金を賜はりし程なるが六十五年を一期として返らぬ旅に赴かれしハ誠に惜むべき事にこそ

土屋礼子による同紙「創刊から明治十三年（一八八〇年）末までの投書欄の悉皆調査」によれば、岡本の投書は一三件採用されている。⁽⁴⁶⁾

また、当時『安都満新聞』の「主幹」を務めていた水明老人こと白石千別も、「喜楽の友を称する詞」を寄せている（第一号二三頁）。白石自身も、「今の世にめではやさる、新誌てふ物数多かるを又其つらに入ばやと恥をましらの人真似するはいとおこがましき業なめれ」と控えめに語りながら、一八七九年八月一日、『喜楽の友』と入れ替わるように『人間与し余誌』なる雑誌を創刊する。⁽⁴⁷⁾ その「仮本局」は、両国米沢町一丁目六番地の安都満新聞社内に置かれた粹盟社で、白石は「主幹」を務め、「編輯長」として岡野敬胤、「印刷長」として秋元光愛と、『安都満新聞』関係者が名を連ねている。『喜楽の友』創刊時に、竹村の名と誌名にちなんだ「若竹にむらがる雀喜びて／らくく遊ぶ友ぐるいして」（第二号二頁。原文では「竹」「む」「ら」「喜」「ら」「く」「友」の左側に○がつけられている）という歌を贈り、同誌の常連投稿者であった「本所竹の屋」なる人物は、この白石の雑誌にもたびたび俳句や川柳を投稿している。

しかしながら、『喜楽の友』がもつとも深い関係を持っていたのは報知社であろう。加藤九郎は、日就社だけでなく、報知社とも関わりがあった。出獄の直後、加藤は報知社を訪れている。その様子は「九郎氏の容貌を觀るに氣膚充盈にして檻虎奔熊の瘦態は聊か見へさりし」と報じられ、一八七九年二月八日の『郵便報知新聞』には、

「旧采風社の編輯長加藤九郎氏は当時日就社に入て編輯を助け又敝社の客員に加ハリ時々投書詩作等を寄する事に成ました」という社告が掲載されている。⁽⁴⁸⁾さらに、『喜樂の友』の「売捌所」の筆頭には、「東京日本橋区葉研掘町報知社」が挙げられているのである。

また、『喜樂の友』には、思いがけない形で小栗貞雄のふたりの兄の名前を見出すことができる。同誌はあまり広告を掲載していないが、その第一号一三頁には、次のようなふたつの広告が出ている。

ホップ苗 定価 十本ニ付金十錢百本ニ付金七十五錢千本ニ付金五円

此花ハ麦酒又麵包ヲ製造スルニ必用ノ品ニテ追々需求モ増ト雖モ是迄舶来ノ品ノミヲ使用セシニ我国ニテモ容易ニ培養シ得ル物ナルヲ以テ今般洋種ホップノ良苗ヲ左ノ処ニテ発売致シ候此段各地ノ物産家諸彦ニ報道ス

麻布区新堀町八番地 学農社

芝区南佐久間町二丁目十三番地 矢野

南豊島郡下落合村四百卅二番地 矢野武雄

定価十本金八錢百本金七十錢千本金五円

葡萄苗発売 芝区南佐久間町二丁目十三番地 矢野

南豊島郡下落合村四百卅二番地 矢野武雄

「芝区南佐久間町二丁目十三番地」の「矢野」は、矢野文雄と考えて間違いない。⁽⁴⁹⁾フルネームを明かしていないのは、これが在官時代のいわば「副業」だったからだろう。

『喜楽の友』が刊行された一八七九年には、小栗貞雄はまだ報知社に入っていない。しかし、小栗がすでに兄や、矢野不在の報知社の屋台骨を支えていた同郷の藤田茂吉をとおして、報知社と密接な関係を持っていたことに疑問の余地はない。のちに三田英学校の講師を務め、洋書を抱えたハイカラな紳士となる小栗が、大学予備門退学後のいわば浪人時代に、ラムを下敷きにした「ロミオとジュリエットの話」を執筆し、それを報知社と深い関係にあり、兄たちが広告を出した『喜楽の友』に寄稿したというのは、十分ありえる話なのである。

おわりに

日本最初の『ロミオとジュリエット』は、一八七九年に雑誌『喜楽の友』に連載されたラムの翻案に基づく「ロミオとジュリエットの話」であり、その作者は小栗貞雄と推定される。私はその可能性が極めて高いと考えているが、それ以外の可能性が全くないわけではない。気になるのが、柳田泉の記述にある「小栗貞雄氏から聞いて書いた」という表現の曖昧さである。柳田は、佐藤蔵太郎との手紙のやりとりからこの証言を引き出している。やりとりのすべてが再現されているわけではないので、実際にどのような対話が手紙をとおしておこなわれたのかは不明だが、柳田はそのやりとりから佐藤のテキストが小栗のテキストに基づくものであると判断している。本論における考察は、この柳田の判断にしたがった。しかしながら、「聞いて書いた」という表現が佐藤自身のものだとする

と、本人の意図は「小栗貞雄から『喜楽の友』という雑誌に掲載されていた「続物語」の存在を教えてもらい、それをもとにして書いた」というものであったにもかかわらず、柳田が誤解したということも考えられる。報知社やふたりの兄を経由して想定される小栗貞雄と『喜楽の友』の近接性は、この可能性に關しても、本論の仮説に対するのと同等の強さの状況証拠となる。ただしその場合、「花月情話」の結末を佐藤はどのように書くつもりだったのか、という疑問が残る。

「ロミオとジュリエットの話」の作者が小栗貞雄ではなかったかもしれない一方で、『喜楽の友』と小栗との間には、本論で想定した以上の関係があった可能性もある。単に「続物語」を寄稿したに留まらず、同誌の編集にも關わっていた可能性である。『喜楽の友』の誌面を見ると、外部からの投稿に關しては、基本的に投稿者の署名がある。「ロミオとジュリエットの話」が無署名で掲載されたということは、それが内部の人間の手になるものであったことをうかがわせるのだ。小栗が当時浪人状態にあったことを考えれば、彼が雑誌の編集に手を染めていたとしても不思議はない。『喜楽の友』に報知社の代表として「祝詞」を寄せた岡敬孝は、「晩年は小栗貞雄氏経営のアルボース会社（深川扇橋）の支配人となつた」という⁽⁵⁰⁾。こうした岡と小栗の親密さも、小栗を『喜楽の友』に結びつける。なるほどこれは「想像説」に過ぎない。しかしながら竹村覚の「想像説」よりは、はるかに可能性が高いのではないだろうか。

注

(1) 竹村覚『日本英学発達史』研究社、一九三三年、一九七頁。

- (2) 小栗貞雄『色是空』佐藤成文堂、一八八九年。同書に原作の表示はないが、ロバート・デイックなる人物の『シチリア王子ヘンリー』という戯曲を下敷きにしたものと思われる。Robert Dick, *The Literary Aurora: Susan Walters, a Common Story, and Prince Henry of Sicily, a Drama*. John Chapman, 1857.
- (3) 竹村覚 前掲書、一七五頁。
- (4) 鶴屋南北『心謎解色絲』（坪内逍遙・渥美清太郎編『大南北全集』第三卷）春陽堂、一九二五年、三八〇頁。
- (5) 前掲書、三九四頁。
- (6) 前掲書、四三三頁。
- (7) 前掲書、四三八頁。
- (8) Ann Thompson and John O. Thompson, 'Pertinent Likeness: Kurosawa's *The Bad Sleep Well* as a Version of Shakespeare's *Hamlet*.' *Shakespeare Studies*, vol. 44, 2006, p. 17.
- (9) Thompson and Thompson, *op.cit.*, pp. 17-18.
- (10) 竹村覚 前掲書、一九八頁。
- (11) 前掲書、二〇三頁。
- (12) 竹村の主張の下敷きとなっているのは、伊原青々園「日本に於ける沙翁劇」（『早稲田文学』第二期第一二五号、一九一六年）および松居松翁「日本の舞台と沙翁の劇」（『世界文学月報』第二六号、一九二九年）である。伊原は「全く偶然に暗合した」可能性を否定し、「私は断じてさうでなく、南北が何等かの機会によつて沙翁劇の筋を聞いたので、其れを自分の作に翻案したのだらうと思ひます」（一四三頁）と断言しているが、その主張に根拠はない。松居は「其筋の進展の具合といひ、その場面のとり方といひ、如何にも原作を理解した翻案のしかたである」（三頁）としているが、それ以上具体的なこととは述べていない。
- (13) 「告條」（『喜楽の友』第六号、一八七九年）一四頁。以下、この雑誌からの引用は、本文中に号数と頁数で示す。
- (14) 篠田敏造「遊戯雑誌 喜楽の友」（『明治文化』第一四卷第五号、一九四一年）四頁。
- (15) 内務省図書局「図書局書目——新聞雑誌之部」内務省図書局、一八八三年、一九二頁。
- (16) 「俗談平話」は、『読売新聞』が自紙の文体を指して使った言葉である。それは「をんなのことも婦子供にわか分りやすきやう俗談平話のごふだんのはなし」

とく」(『読売新聞』一八七五年四月三〇日、第二面)書かれた口語体である。

(17) Charles Lamb and Mary Lamb, *Tales from Shakespeare*, Penguin, 2007, p. 210.

(18) 『函右日報』一八八四年二月八日、第四面。「シエーキスピアノー」は「シエーキスピアノ」の誤植と思われる。

(19) 柳田泉『政治小説研究 上巻』(明治文学研究第八卷)春秋社、一九六七年、二二三頁。矢野には、公式の伝記と呼ぶべきものがある。晩年に大阪毎日新聞社の副社長を務めた関係で、同社の委嘱を受けて小栗貞雄の息子、小栗又一がまとめた『龍溪矢野文雄君伝』(春陽堂、一九三〇年)である。同書は、矢野の帰郷について「暑中休暇をとつて郷里大分県に帰り、佐伯の水辺に釣を垂れて、悠悠英気を養つて」いたとしているが(二七八頁)、佐藤の記述の方が正確であろう。

佐藤はまた、「然ルニ豊後地方ノ人士ニシテ既ニ先生ノ名ヲ知ル者争ヒ来テ先生ヲ招待シ。親睦ノ筵ヲ開ク。先生距離ノ遠邇ヲ問ハズ。赫日炎天燬クガ如キモ。尚ホ厭ハズシテ之レニ赴ク」とも述べている(佐藤蔵太郎『矢野文雄先生伝』東京同益出版社、一八八四年、一三頁)。

(20) 報知新聞社『報知七十年』報知新聞社、一九四一年、一八頁。

(21) 矢野文雄『齊武名士経国美談 前篇』報知新聞社、一八八三年。

(22) 『函右日報』一八八四年二月二二日、第四面。

(23) 『函右日報』一八八四年二月二六日、第三面。「しかしこれは、単なる表面的な口実で、実はほかに理由があったのである。それは、菊亭がこの『ロミオとジュリエット』を「函右日報」に訳載し始めたのを、報知社の主筆藤田鳴鶴(藤田茂吉)(これも菊亭の同郷先輩)が見て、あの話は自分が後で「報知」に載せようとしているものだから、君の方を止めてくれなくては困るといったので、菊亭もやむなく、中絶してしまったのだという」(柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(明治文学研究第五卷)春秋社、一九六一年、二七五頁)。

(24) 「ロミヲ」の漢字表記には揺れが見られる。基本的に「露英雄」が用いられているが、「第二回」「第三回」「第三回ノ続キ」では「魯英雄」となっている。これはいずれも魯坐倫が登場する回であり、彼女の名前の表記に引っ張られたものと思われる。

(25) 『函右日報』一八八四年二月九日、第三面。

(26) Charles Lamb and Mary Lamb, *loc. cit.*

- (27) 『函右日報』一八八四年二月九日、第四面。
- (28) Charles Lamb and Mary Lamb, *loc. cit.*
- (29) 『函右日報』一八八四年二月九日、第四面。
- (30) Charles Lamb and Mary Lamb, *op. cit.*, p. 211.
- (31) 『函右日報』一八八四年二月一六日、第三面。
- (32) 『函右日報』一八八四年二月一〇日、第四面。
- (33) Charles Lamb and Mary Lamb, *op. cit.*, p. 213.
- (34) 『函右日報』一八八四年二月二日、第三面。
- (35) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』、二七四頁。
- (36) 三田商業研究会『慶應義塾出身名流列伝』実業之世界社、一九〇九年、二三五―三三六頁。小栗姓なのは、「旧幕臣小栗上野介(小栗忠順)の後を相続して其姓を冒したからである(同書、二三五頁)。なお、彼が洋行したのは、一八八八年ではなく一八八九年である。同年六月七日の『郵便報知新聞』朝刊第三面には、「本社の小栗貞雄氏及び諸葛小弥太氏は明八日午後六時新橋発の汽車にて東京を發し翌九日横浜解纜の仏国郵船メルボルン号に乘組み先づ仏国へ向け出發する筈なり」との記事が掲載されている。
- (37) 篠田鈺造「小栗貞雄翁を追憶す」(『明治文化』第八卷第六号、一九三五年)六頁。
- (38) 柳田泉『政治小説研究上巻』、二二五頁。
- (39) 前掲の佐藤蔵太郎の矢野文雄伝に、両者の佐伯時代の結びつきをうかがわせる記述はない。小栗又一の前掲書には、佐藤蔵太郎の名前は登場しない。矢野文雄は八歳から藩校で学んだ。四教堂という名のこの藩校は、「中士以上の子弟が入るところ」(小栗又一 前掲書、八五頁)で、下士の家に生まれた佐藤が通うことはなかったものと思われる。佐藤の自叙伝における学校教育に関する記述は、「明治三年(一八七〇年)年十六、郷学関令蔵ノ私塾暇習館ニ入り、漢籍ヲ学ブ」というのが最初である(柳田泉『政治学研究上巻』、二二三頁)。御手洗一而は、「佐藤はこの時(一八八一年)の矢野の帰郷時」初めて矢野に会い、県下の政治情勢を話しあったが、佐藤自身は上京の意志があることを告げ、矢野も心よく引き受けた」としている(御手洗一而「明治佐伯の三青年——龍溪・鳴鶴・鶴谷(二四)」(『佐伯史談』一四六号、

一九八七年）五〇頁。

(40) 報知新聞社 前掲書、八頁。

(41) 篠田鈺造「報知社の岡敬孝」〔明治文化〕第一〇卷第二二号、一九三七年）六頁。

(42) 柳田泉「明治大正文芸雑誌遷史」〔新潮〕第三二年第一二号、一九三四年）四九頁。この論文は、柳田泉「隨筆明治文学」(春秋社、一九三八年)にも収録されている。

(43) 読売新聞社社史編集室「読売新聞発展史」読売新聞社、一九八七年、一二七頁。「読売新聞」一八七九年二月一二日の第三面から第四面には、加藤入社社告が掲載され、一六日の第四面には本人による入社にあいさつが掲載されている。

(44) 『読売新聞』一八九〇年一月二七日、第二面。

(45) 『読売新聞』一八八一年二月二七日、第二面。同紙の二月四日第三面および一〇日第四面には、投書家仲間が岡本の死を悼んだ歌が掲載されているほか、二月八日第一面には「故開拓権少書記官 岡本長之君ハ多年奉職 勉勵されたに付き祭送料として金五百円を賜りたり」という記事も掲載されている。

(46) 土屋礼子『大衆紙の源流——明治期小新聞の研究』世界思想社、二〇〇二年、一一四頁および一二〇—一二二頁。

(47) 水明老人「緒言」〔人間万事 与し余誌〕第一号、一八七九年）一頁。翌年一月二〇日発行の同誌第一二号には、「当よし余誌旧年僅か十号を発兌仕候のみにて御座候処不図江湖風流諸君の御愛顧を以部数殊の外相増候」との「社告」があるが(一四頁)、二月五日発行の第二二号をもって発行は途絶えたようである。

(48) 『郵便報知新聞』一八七九年一月二三日、第二面、および二月一八日、第三面。原文のルビは左側に付されている。岡敬孝の二度目の筆禍は、「九年(一八七六年)三月、高知の植木枝盛といふ人の投書で、『猿人政府』と題する政府の凶暴を罵つた名文を掲載したため、政府当局の怒を買ひ、禁獄一ヶ年半罰金三百円に処せられた」ものである(報知新聞社前掲書、一三一—一四頁)。つまり加藤と岡の入獄時期は重なり合っており、加藤が報知社の客員となつたきっかけも、日就社入社と同様、獄中にあつたのかもしれない。宮武外骨によれば、「此客員たることは短日月の間であつたらしい、加藤氏の寄稿と認むべき文章は載つて居ない」(麁姓外骨「禁獄三年の采風新聞記者加藤九郎」〔新旧時代〕第三年第四冊、一九二七年)二五頁)。

(49) 前掲の矢野文雄「齊武名士 経国美談 前篇」奥付に記載された「纂訳兼出版人 矢野文雄」の住所は、この芝区南佐久

日本最初の『ロミオとジュリエット』

(50) 問町二丁目一三番地である。
篠田敏造「報知社の岡敬孝」六頁。